

佐藤春夫『のんしやらん記録』論

——都市空間と〈生〉の様態——

中 嶋 優 隆

一、はじめに

佐藤春夫『のんしやらん記録』は『改造』（第一一巻第一号、一九二九・一）に発表された短編小説である^①。

未来都市を背景にし、人間身体の植物化を描いているという点で一種のSFとも言える『のんしやらん記録』は、同時代において芥川龍之介の『河童』（『改造』第九巻第三号、一九二七・三）と引き比べられながら「人間生活に対する冷たい皮肉」として、あるいは、「佐藤氏の文学的述懐のなかには諷刺が含まれ（中略）その述懐に即したところの作品」として読まれ、佐藤春夫の創作における「新しい試み」だと位置づけられた^②。発表当時の「諷刺」「皮肉」という指摘は以後の評者たちも言及しているところである^③。

近年の研究は、「諷刺」「皮肉」の内実を探ることに焦点が絞られ

ている。河田和子は発表当時の低い評価は文壇事情によるもので、

「芸術派と無産階級文学を綜合する小説の可能性」の模索だったと評価した^④。また、中沢弥は同時代に紹介された映画『メトロポリス』^⑤などの未来に関する言説と作中に描かれた未来との類似を指摘し、未来都市に宿る権力性を明らかにした^⑥。これらの先行研究をふ

まえつつ、人間身体の植物への改変を詳細に意味つけたのが村田裕和である。村田は特に「出来そこなひの葉」に注目し、「言語的動物としての人間の〈生〉を、アレゴリカルに可視化する装置が植物化実験だ」と解釈する^⑦。また村田の論考では、中沢論で指摘された都市空間の権力性に対する抵抗の可能性が「出来そこなひの葉」のもたらす混乱に見出されている。以上のように整理できる『のんしやらん記録』の解釈は、同時代評で指摘された「人間生活に対する冷たい皮肉」「諷刺」を、権力、階級闘争の問題系に置き直して読

解する試みだったといえる。ただし、本作品を論じる上で、本稿が重要視したのは、作中で描かれる都市空間が社会階級を反映させたものであるにしても、階級闘争⁶のものが描かれているのではないということだ。未来都市というひとつの空想を、同時代の未来言説との類似からすぐさま階級闘争のアナロジーとして捉えることに疑問を差し挟むことが本稿の前提にある。

以上を踏まえ本稿では、『のんしやらん記録』発表当時において未来がいかなる想像力を呼び込む時空間であったのかを確認し、ノンシヤラン市という未来都市との差異を明らかにする。その上で、人間身体の植物化の実験に焦点を当て、「老人」、「彼」、人々の三者の植物化の差異を語り手がどのように意味づけているかに注意を払いつつ、「彼」が主人公とされることで導かれる階級闘争とは別の問題系を抽出する。こうした考察を通してこの物語が未来を設定していることの意味を改めて明らかにしたい。

二、未来都市の時空間

近代文明を象徴する科学技術の発達は、それがもたらす〈未来〉への想像力をかき立てる。一九二〇年代はそうした想像力が花開いた時期であった。たとえば、科学記事やSF小説を中心に掲載した『科学画報』では未来の兵器や都市、あるいは人造人間についての

記事が賑わいを見せる。なかでも同誌一九二七年一月号（第八巻第一号）で組まれた特集「百年後の未来」では、關口鮎吉「天体との交通問題」、永井潜「人造人間は可能か」、鳥居龍三「百年後の人類」、中上豊吉「百年後のラヂオ」、安堂光二「百年後の地下文明」、内藤邦策「飛行機の将来」、記者「未来の戦争」、宮里良保「百年後の科学画報」、弓削田清二「百年後の都市訪問記」などが掲載され、列記したタイトルからも分かる通り、宇宙から都市空間、人造人間、機械、兵器など多岐にわたって科学技術がもたらす〈未来〉が議論された。それらのうち、たとえば安堂光二は文明の地下への拡張を論じるなかで、今後開かれていく地下文明における「光」と「空気の備給をいかに解決するかを示し、永井潜は「有機物を人為的に試験管内で造る」方法、すなわち人間が有機的体を造り出す方法を検討した^①。また、この『科学画報』の特集以外にも野口征人「摩天楼は行詰つたか？」（『科学雑誌』第八巻第二号、一九二八・二）、宮里良保「百年後の世界」（『新青年』第一〇巻第四号、一九二九・三）などを見れば、科学技術の発展によって都市空間が拡張し、人間が広義の創造主たることが〈未来〉において期待されていたことがわかる。

『のんしやらん記録』に描かれた未来都市ノンシヤラン市では、地下世界で「空気」や「日光」、「食用瓦斯」が不足している様子が

描かれる。そのような未来の都市は、安堂光二や宮里良保の指摘と重なり合う。これは一つの例に過ぎないが、村田裕和が「一千年後を描く本作を一九二〇年代の社会や文化状況と対応させながら読解することは、必要不可欠な作業である。しかし、(中略)同様の未来イメージを共有する例は、際限なく拡散するに違いない」といみじくも述べているように、『のんしやらん記録』に描かれた〈未来〉は同時代的な想像力の延長線上にあることはまちがいないし、その引用のモザイクはどこまでも拡散していき、類似点を指摘することには限りがない。

しかしここで科学技術に基づく具体的な想像から抽象的概念としての〈未来〉にも注目し、諸言説と『のんしやらん記録』との差異を析出してみたい。端的に言えば一九三〇年前後において〈未来〉は、産業社会が発展した結果到来した資本主義社会の問題を著しく描くモチーフであった。『のんしやらん記録』発表当時、世界的に話題となったのが映画『メトロポリス』および、カレル・チャペックの戯曲『R・U・R』(原著一九二三年、最初の日本語訳は宇賀伊津緒訳『人造人間』(春秋社、一九二三年・七)である。『R・U・R』の訳者鈴木善太郎は「これは今日の労働者の状態、むしろ資本主義に対する明らかな諷刺」だと述べている¹³。また、シナリオ版『メトロポリス』の訳者秦豊吉は「全く空想の都、未来の都」に

において「資本家と労働者が遂に衝突し」たと解説している。両者ともに、労働者対資本家の対立が描かれた時空間として〈未来〉を意味づけている。特に『メトロポリス』では地上⇨資本家の空間、地下⇨労働者の空間と分けられたように、階級の対立が都市空間の構造に反映されているという解釈があったのである。

『のんしやらん記録』も、一見すると都市構造を社会階級の反映として解釈するコードを誘い込むように描かれている。

下層社会——どん底の世界。そんな言葉は今や単に抽象的な表現ではない。具象的なものとして文字どほりに実現された。

地下三百メートルにある人間社会の最下層の住宅区(？)(これをしも住宅と呼べるならば)である。

「下層社会」が「抽象的な表現」ではなくなり、「具象的なもの」として実現されたという冒頭の語りは、「抽象」概念である人々の社会階級が都市空間の階層という具体的な実体に反映されていることを意味している。また上下の「光」「真黒」の対比や人々の生活の豊かさを細分化するインフラの違いは、資本主義社会の階級対立を読み込ませる仕掛けである。

しかしながら、ノンシヤラン市はこれらの類似点から逸脱するようにも描かれている。まず、階層といっても二層の対立ではなくインフラや娯楽の有無(自動車、交通機関、ラジオの娯楽放送の有

無)で細分化されているし、「下層社会」にしても「最下層の住宅区」(傍点引用者、以下同様)であって、工場など労働のための空間ではない。また、「下層社会」の人々は「枿」のような「高さ一メートル、巾は三分の二メートル、長さ一メートル半の場所」のなかで労働することもできずに、辛うじて生命を維持し、あるいは維持せられていくにすぎない。つまり、人々は社会的な主体となる以前の状態で放置され、同じ階級の中での横断的なつながりも絶たれているのである。こうしたことを踏まえれば、『のんしやらん記録』は同時代の〈未来〉言説のうち科学技術に関わるものは盛り込みつつも、労働者対資本家という資本主義社会の縮図として表象するようなあり方とは差異化されていると言えよう。

したがって重要なのは、「下層社会」の人々が労働者階級といった社会的主体化以前の状態、〈生〉そのものとして存在していることであり、そのうちの一人、少年の「彼」が物語の主人公として据えられていることである。この点は、第三節以降に検討するとして、ひとまずノンシヤラン市の都市空間について意味づけを行うために注目しておきたいことがある。〈未来〉という設定が前景化されるがゆえに先行論では指摘されてこなかったが、物語世界においてノンシヤラン市自体が成立した歴史的経緯が語られていることである。それは「老人」の口から次のように語られている。

もともと私は歴史の学者だ。さうして二十世紀と二十一世紀といふ昔の時代のことに興味をもつてゐてね。それは実に面白い時代なのだ。当時、新しい錬金術が流行してね。何でもこの世界といふ立体を一度逆にひっくりかへして置き直して見ると、人生はどこともかしくも光明的なものに、黄金になるといふ思想なのだ。そこで世界が非常に動揺し出してね。その結果はひどくごつた返した後はどうやらひっくりかへして置き換へたのだ。折角だんだん落着いて新しい世界が出来てみると今日の世の中なのだ。私が二十世紀に興味をもつてゐるといふのは、そのころ極度に発達してゐたその当時の世界の状態が、不思議と今日の世界と大へん似てゐるからなのだ。かういふ研究を、私はまだ若くつて地上の二十階に住んでゐた頃に、発表したものなのだ。そこで私はその学者の社会から追ひ出されたのだ。

——「世界といふ立体を一度逆にひっくりかへして置き直」すことで「人生はどこともかしくも光明的なものに、黄金になるといふ思想」——が影響した。ノンシヤラン市は、この「新しい錬金術」が実現した結果である。しかし、老人の言葉を介して注視されているのは、その「新しい錬金術」が「流行」した「二十世紀(中略)当時の世界の状態が、不思議と今日の世界と大へん似てゐる」

ことである。つまり、「新しい鍊金術」という思想は、社会にある種の下層構造が存在することを前提に、その上下を反転させることで人々の「幸福」を実現しようとするものだったが、その結果、反転させる以前と全く同じ社会構造が反復されたということなのである。

「二十世紀に流行した」「新しい鍊金術」は『のんしやらん記録』発表当時に注目されつつあったマルクス主義的な革命的思想を想起させるが、その思想の実現であるノンシヤラン市は、第二次世界大戦後明らかになっていく社会主義国家の現実を思弁的に先取りしている。マルクス主義的な階級闘争は、プロレタリア独裁を志向する。それは一面において新たな権力の誕生であり、それは場合によってスターリニズムのような事態をもたらす。同時代の『メトロポリス』評などから、〈未来〉が資本主義社会の縮図——資本家と労働者の対立をその空間構造において表象するもの——として想像されたなかで、『のんしやらん記録』の時空間は単純に資本主義社会のデイストピアを描いているのではない。むしろ、それが一度反転したにも関わらず、結果的に階級社会が再来している時空間なのである。このような分析に基づきつつ、なお一層この物語の思弁的可能性を捉えていくならば、資本主義批判とは別の文脈から『のんしやらん記録』を読解できる可能性が開かれてくる。では、その文脈とは何か。再び「下層社会」の人々が「柀」のような空間で辛うじて生

命を維持し、あるいは維持させられていたことを想起しておこう。

彼らに生死の自由はなく、その〈生〉は「政府」に管理されている。しかも、「政府」は人々の死を「統計」として管理し、植物化実験が「過剰ナル人間ヲ調節」することになると同時に、「人間社会ニ貢献スル」ことになると説く。このように排除と包含の論理において「政府」が人々の〈生〉を直截に管理しているのならば、この物語で前景化されて描かれているのは、労働者と資本家といった社会的主体やその闘争ではなく、生物としての人間が管理社会に置かれているさまである。『のんしやらん記録』というテクストは、〈生〉と管理権力の問題から捉え返さねばならない。そしてこの問題が顕在化するのが〈生〉の様態に直截働きかけてくる植物化実験なのである。

三、「実験」としての植物化

本節では人間身体の植物化という一種の身体改造がどのような想像力のもとにあったのかを確認し、植物化がその本質において「実験」であることから導かれる既存の管理権力との対峙の仕方を明らかにしてみたい。

ところで、『のんしやらん記録』発表当時の一九三〇年前後ににおいて人間身体の改造がいかなる想像力のもとにあったのかをたどれば「人造人間」や「ロボット」の存在が浮かび上がる。『メトロポリ

リス』にも登場し、また、先に指摘した一九二七年一月の『科学画報』の特集「百年後の未来」では、永井潜が「人造人間は可能か」というエッセイを発表している。一九三〇年前後にはこれ以外にも、「人造人間」や「ロボット」をめぐる、多くの主張がなされている。このような人間身体と機械とのグロテスクな接続の中に労働機械へと化していく人間を見る想像力に反して、『のんしやらん記録』は人間を植物という有機体、生物へと変身させる。変身のような質的差異こそが重要だろう。

さて、『のんしやらん記録』の植物化は、「彼」の場合は「政府」が参加を呼びかけた「慈善デー」の施策の一つとして、「老人」の場合は「処罰」という明かな実効権力として行われる。これに関わって村田裕和は、「彼」が植物化を選択したことを、アルチュセールの議論を踏まえつつ「主体」化の過程として解釈している^④。たしかに村田の整理は、植物化実験の被験者の側に焦点を当てれば首肯できるものである。しかし、本論で注目したいのは、「何か被術者——つまり君たちの性質などとも密接な関係があるらし」く、「同一の手術方法を講ずるにも拘はらずその結果がどうも同一の植物にはならない」という施術者の言葉、すなわち『のんしやらん記録』の植物化がその本質において「実験」であるという点である。確実に成功する方法を作業として施術していくのではなく、実験として

試みることに。それは、被術者、施術者の両者にとって偶発的な事態を抱え込みつつ行われるものである。植物に変身させることを主たる目的としながら、被術者の「性質など」と実験結果の関係を解明する、出来事の「偶発性」を意味づけることが付随的な目的としてある。そして重要なのは、「実験」結果の三者の（生）の様態が、ノンシヤラン市という管理権力あるいはその論理に対する距離を表わしていると考えられることである。このような実験としての植物化と三者の差異にこそ『のんしやらん記録』の特徴は見出されねばならない。本稿では物語の論理に即して、三者の差異を検討してみたい。

まず、この実験としての性質を顕著に表している「老人」の場合を見ていきたい。「老人」は「歴史の学者」として「人間には階級の如何にかかはらずその健康上必要な」「日光や空気」を「人類が殆ど平等に享有することが出来」なくなつた「近代の文明」を批判し、ノンシヤラン市の都市空間から「排斥」された存在である。また別の箇所では「老人」は、「どんなえらい解剖学者も人体のなかからその存在を発見した事のなかつたもので」「人間には霊といふものがあるといふ考え」を抱いたことが原因となつて「何百層とある社会の種々雑多な階級から一段一段と追はれた」存在だと語られる。つまり、「老人」は「歴史」を通してノンシヤラン市の論理を相対化する

る見地を獲得し、批判的主張を行ったために都市空間のどの階層からも（最下層に送られるわけでもなく）排除された存在なのである。このような「老人」に対する植物化は「空気」と「日光」を盗んだ「死刑の処罰を受ける代わりとして」行われ、施術者らの目論みでは「植物界に於て最も哀れな状態にある微小な鮮苔類」「植物の世界に於ける最下層階級」に変身させられるはずだった。しかし、実験の結果は正反対ともいえるものになる。次の引用は「老人」が変身する場面の描写である。

周囲の見物人たちは泣き叫び、総立ちになり、手術者はその威厳をも忘れて、その場に坐つてしまひ、茫然自失してゐた。これらの騒動のなかに、地面を震動させながら根を張つて奇怪な発生物は、双腕を高く天に挙げ二本の腕の周囲からはまた諸所に各々の新らしい二本の腕を生じ、瞬くうちに数千の腕を生み出した者は、その手の指から最も壮な火焰のやうな美しい緑を滴らせながら、なほも刻々に高く拡がり延びる事をやめようとはしなかつた。巨大な魔物は風を呼び起した。さうしてその新鮮な葉はサラサラと鳴り響いた。それは植物の言葉では哄笑に外ならなかつた。（傍線部、波線部引用者）

語りに注目すれば「老人」―「榭」の変身は、全てにおいて両義的なものとして描かれている。「老人」―「榭」は、実験を観覧す

る人々からは傍線部にあるように「奇怪な発生物」「巨大な魔物」と映るが、植物たちにとって、その姿は波線部にあるような生命力にあふれた姿に映る。「奇怪」「魔物」であると同時に生命力漲る姿こうした両義的な「老人」の姿は、植物化以前にも見られる。「少年が神仙のやうに思ひ込んでゐた者は泥棒であつた。」―少年「彼」に即して「神仙」と喩えられる「老人」は、ノンシヤラン市「政府」にとつては「日光」「空気」を盗む「泥棒」である。語り手はこの両義性を示唆しつつ、一方でその両義性を都市空間に宿る権力を相対化する可能性へと転ずる。語り手は「老人」に「幸福な秘密の世界の創造者」、「新らしい世界を夢みてゐる人」、「半羊神¹⁵」といった比喩形象を与えており、これらはすべてノンシヤラン市の論理を批判し、新たな世界を想像する「卓越個人」という「老人」の「性質」を志向している。こうした「老人」の植物化は創造者としての「卓越」性が具現化される過程である。その「卓越」性は実験を観覧する人間たちには理解できない「植物の言葉」が「老人」―「榭」によつて生み出され、のちの箇所では「葉」に変身した「下層社会」の人々が、「老人」―「榭」に寄生することで生きてきたことから明らかだろう。「老人」は、ノンシヤラン市「政府」の論理の外側に、常に彼独自の世界を創造しつづけている（超越的存在）なのである。

このような「老人」の植物化は、施術者側の意図を悉く脱臼させている。「処罰」に対する新しい世界の創造、「鮮苔類」に対する「榭」。結果は施術者側からすれば失敗である。しかし、新しい世界秩序の樹立、植物としての身体獲得として見れば成功といえる。この両義性が意味するのは次のような捉え返しだ。何をもって「実験」を成功とするのか、その問いに対する答えは基づく論理によって異なるということ。「実験」は、「老人」——「榭」によって、その意味が〈決定不可能〉な過程へとずらされるのだ。

以上のような「老人」の植物化と対照的なのが、「葉」に変身する「下層社会」の人々である。「葉」について多くは語られない。ただし、彼らが「運動能力」を持ち、ノンシヤラン市を自由に移動できることが、のちに明らかにされる。このような変身結果は、施術者側から見れば、「出来そこなひ」の失敗であり、植物から見れば「葉」でありながら「運動能力」を持つという点で、「政府」の意図を逆手に取った成功ともいえそうである。ノンシヤラン市という階層社会を自由に越境できるという点においても。しかし、「葉」に既存の論理、管理権力への抵抗の可能性を見出すことはできない。それは彼らは植物化以前にノンシヤラン市に辛うじて生命を維持させられていたことと同じように、「榭」という新たな秩序に「寄生」して生きることしかできない、すなわち既成の論理に依存する存在

だからであり、彼らの「運動能力」は「政府」に「欺かれた」という動機のもと「貴婦人とかいふものの肌に俺はちよつとでも触れて見たい」という性的な欲望のためにのみ用いられるからだ。「葉」は既成の論理に依存し、それに裏切られたと感じたとき、眼前の欲望を充足させるだけの暴徒と化す。そのふるまいは混乱をもたらしたとしても、新たな世界を創造することは決してないのだ。

〈生〉と権力の関わりについて『のんしやらん記録』というテクストは、眼前の階級を転覆すること、越境することの無意味さを示す。そうではない仕方の対峙。それは、現代のわれわれからの是非は措くとしても、テクスト内では「老人」の〈超越性〉に仮託されている。階級を生み出す根源的な思想自体を注視し、新たな思想を樹立していくことの必要性が「老人」を通して描出されているのだ。

四、〈生〉の縮約

前節では『のんしやらん記録』が〈生〉と管理権力の問題にどのような解答を与えているかを確認した。本節では、「老人」——「榭」、「葉」という両極の間に主人公「彼」の変身を読み解き、「彼」が「主人公」として設定されていることの意味を考察する。なお、本稿での要点は、従来の解釈では〈変身〉という転換点だと考えられてきた植物化を、一種の〈縮約〉の過程として読み解くことである。

「彼」は、「老人」や人々と同じように植物化実験を受ける。ただし次のように。「彼は決して植物にならなかった訳ではなかった。けれども彼は死にたくはなかった。さうして今日のままで人間の形を保たうとしたならば、もう十時間とは経たないうちに死ぬ外はない」——「彼」においては身体の形態はさほど問題ではない。それよりも生き残ることが欲望されているのだ。それを確認したうえで、「彼」の身体が変化しても、身体以外で変化しなかった点に着目してみたい。一点目は、「彼」が一貫して「空気」と「日光」を欲望していることだ。植物化以後に「空気」と「日光」が欲望されるのは、植物の生命維持という理由が想定できるが、「彼」は植物化以前にも同じ欲望を抱いているのである。

朝といふことがこんな世界でもわかるのが第一に不思議であった。ラヂオは絶え間なしに響いて来た。しかし、そんなものは生きるためには何の必要もない。欲しいものは空気だ。それから日光だ。それにくらべると食用瓦斯などはずっと後でもいい。「彼」は、人間である時点からすでに、「食用瓦斯」よりも「空気」や「日光」を「生きるために」求める。「彼」においては「空気」と「日光」の充足が、「生」の充足と強く結びついているのだ。あるいは次のような語りもこれと通じ合う。未だ人間である時点において「彼」が「日光」に「食欲」を覚え、「日光を手で掬うて食

つてみた」という奇怪な行動——これに語り手は「(彼等ら「引用者注：「彼」以外の地下世界の人々」のすべても亦食欲を感じてゐるであらうか)」と反語的に補足することで、「彼」だけが「日光」を「食欲」として欲望している存在として強調している。

こうした「彼」の欲望の所在から次のように言えるだろう。「彼は人間の身体を持つている時点から、すでに植物としての生を内包していたのではないか。「彼」の植物化実験とは(変身)という転換点ではなく、「彼」に内在する植物としての生へと縮約されていく過程だったと捉え返すべきではないか。

このような解釈は別の観点からも明らかだ。「政府」は植物と人間の違いについて「唯一の問題は発言能力及び自己の自由なる意志による運動能力の二点にある」と述べる。しかし、「彼」は言う。「あの最下層住宅区の高さ一メートル、中は三分の二メートル、長さ一メートル半の場所のなかで自己の自由な意志で運動出来ることを喜べる者と想像してゐるらしいのは寧ろ滑稽であつた。」——そもそも「彼」には自由な「運動」など不可能だ。そして、「発言能力」に関して、「老人」が逮捕される際に「彼」自身の保釈の等価交換として「音声を失」い「口が利けなくなつてしまつ」ている。「彼」は内発的な欲望の次元においても、置かれた身体的状況としても植物的生を営んでいるのである。

このような生のあり方を考える際、ジョルジョ・アガンベンの議論が有効な補助線となる。アガンベンは人間的生の内部には、〈植物的生〉の次元が基底として存在すると指摘している。¹⁶⁾〈植物的生〉とは、生命維持のために意思とは関係なく内臓器官などが活動する生の次元のことであり、人間は自らの内部にある植物的生の次元、そして動物的生の次元を排除することによって「人間」たることを確立してきた。アガンベンの議論は人間と動物の境界を定める（人類学機械）を停止させる方向に深められていくが、ここでは動物的生の次元を意思の統御とは異なる領域だとして突き詰めるならば、〈植物的生〉と同義に解してよいだろう。この点に目を向けさせるのが『のんしやらん記録』なのである。¹⁷⁾

では『のんしやらん記録』において主人公「彼」を通して人間と植物の距離はどのように描かれているのか。結論を言えば、それらは間違いなく、併存するものとして語られている。アガンベンが人間の動物化／動物の人間化は常に隣り合わせのもので、両者の間に境界を引けないといったように。

再び「彼」の「日光」と「空気」への欲望に注目してみよう。この二つの充足は次のように語られている。

この二人住んでゐた小世界では、日光もよく射したし、空気にも飲食物にも不自由なかつた。適当な温度までもあつた。

老人はそれらの事に就ては一言も言はなかつた。少年も亦はじめのうちこそそれを奇異にも有難くも思つたがそのうちいつの間にかもう人間当然の権利として怪しまなくなつた。

「彼」にとつて「日光」「空気」は人間であるときも、植物であるときも「生きるため」に欲望されていたことは、すでに確認した。引用部では「日光」「空気」が〈植物的生〉を維持する要であると同時に、引用部では「人間当然の権利」としても語られている。「彼」においては〈植物的生〉の充足と「人間当然の権利」の充足が「日光」「空気」という一点において重なっているのだ。このとき、すでに人間と植物は別々の生ではない。二つは「彼」という個のなかに併存している。いや、「彼」だけではない。「老人」も然り、下層社会の人々も然りである。ただし、「彼」以外の人間たちは必ずしも「人間」に内在する〈植物的生〉に意識的ではない。語り手によつて「彼」だけがそれを意識的に欲望する存在として注視されているのだ。

『のんしやらん記録』は「彼」を主人公として描くことで、人間のなかに〈植物的生〉があることに気づかせる。こうした分析を踏まえ、改めて「老人」と「彼」の差異を整理しておこう。「老人」の植物化は植物としての生命力が漲る〈植物的生〉への変身であり、その〈生〉の様態において自己充足がなされるものであつた。「彼」

と「老人」に共通するのは、「出来そこなひ」の「葉」にはならず
に、「櫛」や「薔薇」という植物にはなりえたことである。しかし、
「彼」と「老人」には決定的な違いがある。それは、「老人」が大地
に根を張ることができたのに対し、「彼」は「鉢」に植えられている
という違いだ。この違いは大きい。「老人」は自己の〈植物的生〉
を自ずから充足させることができる。¹⁸⁾しかし、「彼」は「鉢」に植
えられ、それゆえ「売子の娘」に育てられざるをえず、言い換えれ
ば「彼」の〈生〉は他者の働きかけが必要不可欠な状況に置かれる
のだ。このような状況も植物化にかかわらず、「彼」をめぐって一
貫していることのひとつだ。「彼」の〈生〉は「政府」から「売子
の娘」の手へと移されただけで、自己の〈生〉の充足、同時に「幸
福」は他者の手に委ねるほかないのだ。

「彼」の〈生〉は常に他者の管理の下に置かれている。それは生
きることはもちろん、死ぬことも他者に委ねられているということ
だ。物語の最後はそれを印象付けている。

彼女の手から、驚きのあまり投げ出された薔薇の鉢は、窓の外
にころがり出た。あたりに風のうなるすさまじい勢で薔薇はぐ
んぐん墜落しながら、叫喚し、こんな世界に生き長らへるにも
及ばないと閃光のごとく感じたが、それきり気が遠くなつた。

……。

「彼」が生きることを諦めたとしても、「気が遠くなつた」だけで
決定的な死は与えられない。また、ここでの「墜落」は、物語を通
して「母親」に高層階から捨てられ、地上付近で「老人」に拾われ、
その後「下層社会」へと送られ、「慈善デー」によって地上へ上が
り、植物化ののち高層階へ移されるという、一連の「彼」の移動を
想起させる。「彼」は死ぬことすら自らのものにすることができず、
管理権力が作動する都市空間を移動し続けるしかないのだ。「彼」
の移動が仮に階級を越境するものであったとしても、この物語はそ
こに解放の可能性を見てはいない。むしろ、〈植物的生〉の次元を
管理権力に委ねない仕方で生きることの困難さを前景化して描き出
している。このことを描くとき、「彼」のような存在が「主人公」
として要請されたのである。

五、〈未来〉を語ること

このような物語を特定の対象の「諷刺」として読むことは、問題
をあまりにも限定してしまう。この物語が問題化するのとは特定の対
象ではなく、われわれの〈生〉そのものである。改めて言えば、未
来都市ノンシヤラン市は、資本主義社会の縮図ではない。あるいは
現存在であることを前提とした闘争の論理、またそれに基づいた社
会批判を展開しているのではない。むしろ、そうした批判や闘争が

前提としている現存在性を揺るがしうる（植物的生）の次元においてこそ権力は作動しているということ。『のんしやらん記録』は、そうした思弁的な洞察をもたらす。それは「彼」が物語冒頭で触知し「声」を奪われたがゆえに言葉でできない「生きるため」の「日光」「空気」への欲望を、語り手が〈植物的生〉の気づきとして言動化することによってなされている。

こうした物語が〈未来〉を設定したことは改めて重要だろう。

本稿第二節でも確認したように、『のんしやらん記録』発表当時、〈未来〉とは科学技術の発展を連想させ、同時に一九三〇年前後の資本主義社会の行く末を想像させるモチーフであった。このような〈未来〉は現代社会が発展していった未来、進歩史観的な歴史認識の地平にある。これに対し、『のんしやらん記録』では語り手によって〈未来〉という時間が古代と裏表のものとして表象されている。――「これらの設備は中古のモノコ王国の賭博場の建築から発達したものである」、「（コロシウムに似てゐる）。語り手は未来の都市空間を古代の遺跡によって表象する。「食用瓦斯」や地下世界といった科学技術がもたらす未来像とともに、それを古代の遺跡として喚べる語り。このようなアナクロニズムは、原始共産主義を礼賛する空想社会主義などのユートピア思想にも見られる手法だが、『のんしやらん記録』のそれは、ユートピア的あるいは牧歌的では決し

てない。むしろこのような語りが生み出すのは、過去から現在そして未来へという直線的時間の攪乱である。このように提示される時間性と未来都市空間の親和性は高い。どういうことか。

村田裕和はノンシヤラン市にラジオが「よく響いている」こと着目し、ノンシヤラン市がイデオロギーの充満する空間であると論じている。^① 本稿でもこれに従いつつ、なお強調しておきたいのは、そのイデオロギーが単一のイデオロギーだということだ。ノンシヤラン市の都市空間は、階級の上下対立を反映した地上／地下という構造なのではなく、幾層にも分けられた序列の反映であったことを想起しておこう。人々はイデオロギーによる序列化に違和感を覚ええない世界。それは、ヘーゲルの歴史が終焉した、正確には一時的に停止したということに言い換えられる。これが重要だ。ヘーゲルの歴史が終焉したのちのいつか、にやってくる問題。それは、現在を前提にした諸闘争ではない。われわれ自身の〈生〉と管理権力との問題系なのである。

注

- ① 初出時のタイトルは『のんしやらん記録』である。『明治大正文学全集 第四〇巻 志賀直哉・佐藤春夫』（春陽堂、一九二九・六）に収

録される際に『のんしやらん記録』に改題された。今回は本文の引用を『定本佐藤春夫全集 第七巻』（臨川書店、一九九八・一〇）に拠り、改題された『のんしやらん記録』を用いる。

② 徳田秋声「新春創作月評(五)」(『時事新報』一九二九・一・七)。なお、川端康成「文藝時評」(『文藝春秋』第七年第二号、一九二九・二)にも同様の指摘が見られる。

③ 井伏鱒二「最近の佐藤春夫氏」(『福岡日日新聞』一九二九・六・二四)
④ 諏訪三郎「解説」(『明治大正文学全集 第四〇巻 志賀直哉・佐藤春夫』春陽堂、一九二九・六)。また前掲注②③でも同様の指摘が見られる。

⑤ 中村真二郎「解説」(『日本文学全集 第二五 佐藤春夫集』新潮社、一九六一・一一)、伊藤整「解説」(『日本の文学 第三一 佐藤春夫』中央公論社、一九六一・八)など。浦西和彦は『のんしやらん記録』を「諷刺小説としては底の浅い」もので、「佐藤春夫の創作力の減退を表わしている」と論じている(『のんしやらん記録』のこと)〔月報 三三〕『定本佐藤春夫全集 第一八巻』臨川書店、二〇〇〇・一二)。

⑥ 河田和子「アンチ・ユートピアと文明批評——佐藤春夫「のんしやらん記録」論——」(『尚網語文』第二号、二〇一三・三)、および「佐藤春夫『のんしやらん記録』補論——文壇の拝啓と賤民文学の試み——」(『尚網語文』第四号、二〇一五・三)。

⑦ フリッツ・ラング『メトロポリス』が日本で公開されたのは一九二九年二月二日だが、映画公開に先んじてデア・フォン・ハルボウによるシナリオ版『メトロポリス』(秦豊吉訳、『世界大衆文学全集 第一五巻』改造社、一九二八・一一)が紹介された。このシナリオ版には映画のステール写真が挿入されている。

⑧ 中沢弥「塔とユートピア——佐藤春夫「のんしやらん記録」の未来都

佐藤春夫『のんしやらん記録』論

市——」(『湘南国際女子短期大学 紀要』第五号、一九九七・二)

⑨ 村田裕和「出来そこないの葉 佐藤春夫「のんしやらん記録」における言語」(『旭川国文』第二七号、二〇一四・一一)

⑩ 同時代に実現した都市文明の地下への拡がりの一つとして、一九二七年に上野―浅草間で地下鉄が開通したことが挙げられる。

⑪ 人造人間というテーマについては、一九二〇年代半ば急速に盛り上がりを見せ、永井潜以外にも多くの記事が見られる。ただし、永井の記事において興味深いのは、その口絵に築地小劇場で上演されたカレル・チャペックの戯曲『ロボット』の写真が用いられ、「ロボット」(人造人間)という説明が付けられていることである。「ロボット」が機械的な存在を指すのではなく、人間が作り出した有機的な身体を指す言葉として用いられたのである。

⑫ 村田裕和(前掲)

⑬ 鈴木善太郎「緒言」(『ロボット…四幕』金星堂、一九二四・五)

⑭ 村田裕和(前掲)

⑮ ギリシア神話に登場する破壊と創造の神。

⑯ ジョルジョ・アガンベン『開かれ 人間と動物』(原著二〇〇二年、岡田温司・多賀健太郎訳、平凡社、二〇一一・一〇)

⑰ なお、アガンベンの進める人間の動物化／動物の人間化の議論を発展的に捉え、植物に注目した議論として、エマヌエーレ・コッチャ『植物の生の哲学 混合の形而上学』(原著二〇一六年、山内志郎ほか訳、勁草書房、二〇一九・八)がある。

⑱ 植物が自己充足することについてはエマヌエーレ・コッチャ『植物の生の哲学 混合の形而上学』(前掲)でも指摘されている。

⑲ 村田裕和(前掲)